2024年月11月24日　青戸教会　「最も小さい者の一人に」　高橋克樹牧師
聖書　ミカ書2章12～13節、マタイ福音書25章31～46節

初代教会がエルサレムでユダヤ教の中の一分派として産声をあげた時、最初多くのユダヤ人たちはイエスを救い主として標榜するキリスト教がユダヤ教内の一分派であると認識していたようですが、それほど急激に勢力を伸ばすとは考えていませんでした。それは、ユダヤ教の側から見ると、キリスト教の信者たちは、いわば、ユダヤ教社会ではぐれ者として忌み嫌われていた徴税人や障碍者、娼婦と思われる人たちが多く信じていたからです。ユダヤ人たちは、程度の差はあれども、基本的に律法を守って生きている人たちですから、キリスト教を信じている人たちが立法を守れもしないのに、信者を増やすとはかんがえられなかったのです。

けれども、キリスト教徒の数は一挙に増えていきます。なぜか。初代教会が紀元後70年以降に急激に信者数をローマ帝国内で増やしていった要因を最近の研究は、飢えている人や生活に困っている人に対する教会内の援助力が半端ないほど強かったためだという結論が導き出されているのです。

紀元後の70年にはローマ皇帝がエルサレム神殿内に自分の彫像を建てる行為に出たため、ユダヤ人たちは反ローマ帝国の抵抗を始めます。もちろん、ローマ帝国軍は当時最強の軍隊ですから、反旗を翻したユダヤ人たちは敗走に敗走を重ね、最終的にはマサダの要塞で完膚なきまでに殲滅させられ、戦いに参加しなかったユダヤ教徒たちは、地中海の広い地域にチリジリになって逃げて、暮らすようになったのです。それ以前から、地中海沿岸地域にいたユダヤ人に対してパウロなど異邦人伝道をしてきたキリスト者たちは、ローマ軍の追手から逃げてきたユダヤ人たちをかばい、異邦人たちによって建てられたキリスト教会に招き入れたのです。

初代キリスト教が生まれたエルサレムのキリスト教会では、パウロなどが異邦人にキリスト教を広めていることに最初偵察部隊を送って、彼ら異邦人のキリスト教信仰がエルサレムの自分たちの信仰と食い違っていないかを確かめてみたのです。すると、割礼を受けないでキリスト教の信仰に入っていることが判明して、エルサレムのキリスト教会のイエスの兄弟であるヤコブなどは異邦人教会の在り方が気に食わないわけです。というのも、エルサレムのキリスト教会の信者たちは、エルサレム神殿への参拝をしていてユダヤ教の枠内にあったのです。ところが、異邦人伝道によって生まれたキリスト教徒たちは、割礼を受け津こともなく、洗礼によってキリスト教徒になっているのです。割礼を受けることは、キリスト教の源流であるユダヤ教の信仰を継承している証なのです。ユダヤ教の神が出エジプトによってユダヤ人たちの導き手になった救済の歴史を継承しているキリスト教と言う立場からすると、割礼は洗礼を受けるために必要な前提条件だったのです。このようなエルサレムのキリスト教会と異邦人教会との軋轢があったのですが、エルサレムはユダヤ教の中心地であったために、ローマ帝国による抑圧が激しく、エルサレムのキリスト教会も衰退の一途をたどることになったのです。こうして、異邦人教会がキリスト教の中心的な思想を形成することになったのです。本日のマタイ福音書でも、その影響が色濃く出ています。

羊飼いが羊を右に、山羊を左に分けるというのは、患難の時代を生き抜いた全世界の

人々に対する裁きが預言されています。羊飼いが羊と山羊を分けるように、全世界の生き残った人々が分けられ、羊は王国に入り、山羊は永遠の火（永遠の地獄）に入るというのです。裁きの基準になるのは、律法を守って来たかということではなく、「キリストの兄弟と呼ばれ、しかも最も小さい者たちの一人」に対する行いによって判断されるというのです。具体的には、『飢えていたときに食べさせ、喉が渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気の時に見舞い、牢にいたときに訪ねてくれた」かどうかだというのです。讃美歌４８６番の歌詞の通りなのです。「飢えている人と、パンを分かち合おう。愛に押し出されて、主の後に続こう。沈黙する人と、共に語り合おう。愛に押し出されて、主の後に続こう。悲しみの人と声合わせ歌おう。愛に押し出されて、主の後に続こう。友のない人と隣人になろう。愛に押し出されて、主の後に続こう。無気力な人と目的見出そう。愛に押し出されて、主の後に続こう」。このような歌の歌詞と同じことを初代教会の人たちは舌からこそ、信者が増えていったのです。ユダヤ教徒ローマ帝国の戦争があった外的な要因があった一方で、キリスト教の内面的な援助思想が相まって、キリスト教は地中海沿岸部で急速に信者数を増やしていったのです。このことが、本日の聖書個所の背景としてあるのです。

さて、私たちはどのような行動原理をもって信仰生活を送っているでしょうか。その前に抑えておかなければならないことがあります。地球上に人類が登場したのは約７００万年前です。弱肉強食の自然界で、人類は最も弱い生き物でした。草食中心で、肉を食べることがあっても、それは自分で狩りをするのではなく、他の動物が仕留めた獲物の食べ残しをあさって食べることが偶然あった程度です。しかし、やがて人類は、道具と火を使うことを覚えたことで弱さを補い、進化していきます。道具を使って狩りをしたり、硬い実をすりつぶして食べたり、火を起こして肉を焼くことで、消化しやすくして食べることができるようになりました。これが料理の始まりで、料理をすることは人類だけが獲得した知恵であり、美味しい料理が食べたいという欲求が人類を高度に進化させたと言うことができる大きな転換点でした。最初の人類誕生以来、ネアンデルタール人など、いくつもの人類が誕生しましたが、最後に生き残ったのが私たちホモ・サピエンスの先祖です。ホモ・サピエンスは約２０万年前に現われ、狩猟採集生活を送っていました。約１万年前にはおよそ７万年続いた氷河期がようやく終わり、地球が暖かくなった時期です。この時期、森が生まれ、さまざまな植物が生い茂るようになり、人類は多彩な森の恵みを手に入れるようになりました。温暖化で海面が上昇して浅瀬が広がると、魚や貝も採れるようになりました。豊富な食料が得られるようになると、食料を求めて移動する必要がなくなり、半定住の生活が始まります。けれども、ホモ・サピエンスはこれまでの人類と比べても、非力な人類でした。ところが、この非力なホモ・サピエンスが他の人類を放逐していくのです。いわば、ホモ・サピエンスがネアンデルタール人やその他の人類を滅ぼしてしまいのです。体力的にホモ・サピエンスが優れていたわけではありません。逆に、自分たちの弱さを自覚していたために、集団で困難を乗り越えていったのです。弱さを自覚していましたから、互いに助け合いつつ、氷河期も乗り越えたのです。この意味で、ホモ・サピエンスと同じく初代キリスト教徒は互いに弱さを補いつつ生き抜いたために、信仰者を増やすことができたのです。その思想の原点には、自分たちの周りにいる最も小さい者たちの一人に対して自分がどのようにかかわるかが信仰を養う最も大切なことだという自覚があったからだということができるのです。